

2 グループ研修報告書

レクサンド視察報告(企業班)

企業班代表 辻野 浩

レクサンド訪問2日目の2012年9月7日、企業班は午前中にトーモクヒュースとレクサンドパンの工場を見学し、午後からアイスホッケー場のロビーで開かれていた企業展示ブースの視察及び地元の企業経営者と懇談会を行いました。

トーモクヒュースはスウェーデンハウスの外壁パネルと窓を製作しています。こちらの工場を視察してまず感じたことは従業員の健康管理です。木を切る時に大きな音が出るので、工場の入り口に耳栓用のスポンジが大量に用意されています。きっと聴力障害を防ぐためだと思いますが、北海道の製材工場でこのような耳栓は見たことがありません。次に時間管理です。従業員に十分な余暇が与えられるようシフトが組まれているようでした。それは工場に貼られていたスケジュールを管理するホワイトボードから見て取れました。この様子からおそらくスウェーデンでは一般的なのでしょうがこの工場では従業員の健康管理が日本より進んでいるように見受けられました。工場内のラインは大まかにパネルの骨をカットし組み立て、断熱材を入れ、合板を張り、窓を付けるという流れになっています。窓は窓枠部材をカットし組み立て、金具を取り付けガラスを入れる工程です。窓は今後、塗装済み窓を増産したいという将来展望があるようです。窓枠部材のカット工程場所のゴミ箱にハネ品があったので見てみたのですが、見た感じ見えそうな部材が入っていました。日本人はちょっとした節や欠けがあるとクレームを言うお客様が多いと言うことでその分ロスが多いという説明でした。その辺はもったいないと言う印象を受けました。全般的に工場はゴミがなく、整理整頓されていて、オートメーション化が進んでいます。非常にきれいな印象を受けました。

次に場所を移してレクサンドパンの工場を視察しました。こちらは工場内は撮影禁止でした。最初に案内された会議室でヨーン社長からレクサンドパンの歴史と現在の業績、今後の展開について説明を受けました。1929年、オロフとアンナジョーンオルション夫妻が近所の農家向けにパンを焼き始めました。その後、ホテルや民宿にパンを売り拡大したのがレクサンドパンの始まりです。近年、レクサンドパンの売り上げは右肩上がりです。会社の経営コンセプトは「伝統を守る」「自然原料にこだわる」「環境にやさしい」です。私がこの工場を見て一番感心したのは自社製粉です。日本の場合、小麦の製粉工場とパン工場は通常、別々な会社です。ところがレクサンドパンには原料であるライ麦を入れる大きなサイロがあり、その横に日本の製粉工場と同じような粉碎施設があります。日本の製粉会社と製パン会社が合体している形態の企業です。次に聞いておもしろいと思ったのは「この工場では化石燃料を用いた電気はほとんど使っていない」という説明でした。ただ、よく聞きますと、同じ電気でも水力で発電された電気と化石燃料で発電された電気とが単に価格で分かっているらしいと言うことでした。きっと電気を選べるシステムなんだと思います。今回、いくつかパンを試食させてもらいましたが、10数年前に食べたときよりおいしい気がしました。私が年を取って素朴

な味が口に合うようになったのか？世の中にオーガニックな素材が浸透し味の主流がいつの間にか変化したのか？いずれにしても今回、旅行中、何度かレクサンドパンを食べてみて意外と飽きないというか、抵抗なく手が伸びると思い、売り上げが伸びているという説明が分かる気がしました。

企業班、午後視察の企業ブースではダーラナホースの着色実演販売、皮のコートやラグなどのテキスタイルが展示されていました。その夕方、同じ建物内上階の会議室で数人の経営者と懇談をしました。残念ながらこの懇談時間は1時間ととても少ないものでした。私としてはもっと世界経済のことや日本のイメージなどについてスウェーデン人の考えを聞きたいところでした。レクサンド側の経営者はレクサンドパン、製材工場、染物メーカー、下のブースでラグの販売をしていた工房、家具メーカーの経営者でした。彼らの目にはスウェーデンを始めヨーロッパ市場はこの先、そう発展する見込みは少ない一方、アジア市場は人口や成長率が高いので「元気」と映っているのではないかと思います。もしかしたら日本を通り越して中国に関心が行っているのかもしれませんが、ヨーロッパのアジアを見る目が実感できた気がします。

企業班の視察に関わらず全般的に経済に関して感じることはスウェーデンの人口は950万人と北海道よりやや多いくらいですが、イケアやH&Mなど世界的企業を輩出している、その違いについてです。またレクサンド市でも姉妹交流にはあまり登場しませんが、日本で言うホームセンター的企業であるクラスオルションは成長著しいと聞きました。北海道で、あるいは当別町に於いてもっと元気で成長力のある企業が育つと良いなと今回の視察メンバーの多くは感じたことだと思います。そのためになすべき事は何なのか？それは簡単に答えがでそうではありませんが、今後、姉妹交流の縁をベースに考えてみたいと思います。そういった意味では今の時代、スカイプやらフェイスブックなどいろんなコミュニケーション手段が発達している時代です。それらを有効活用し、更に日本とスウェーデンの異文化の差を生かして新しい発想を生みだし、今までにないビジネスを起こす前線に当別はいると思います。企業班の研修を通じてこういった姉妹交流が定着している当別の優位性を生かすことがこれからの重要なポイントであると感じました。このような機会を与えて頂き感謝致します。ありがとうございました。

訪問団(農業班)報告書

団員 神林俊一 市川正 竹田和雄 山田智 古谷陽一 荒戸恵子 渡部昇 川村義宏

事務局 増輪肇

通訳 森ステファン

ジャガイモ・小麦農家(ラーシュ オールハンス氏)

1600年代よりこの地で営農しているそうです。4名の構成員で144ha(農地)+550ha(森林)の経営面積で、本年はジャガイモ40ha、小麦65ha、家畜飼料39haを作付けしたそうです。

ジャガイモはイギリスのキングエドワードとオランダの2品種を植えており、収量はha当り25t~40t。なかには、80tの信じられない収量をあげている農家もいるそうです。選別から販売まで手掛けており、最終的には洗って3kg~200kgの形でスーパーなどに卸しているとのこと。品代は、10kgが610円ほどで、営業は社長がしているそうです。

小麦は、収穫済の圃場がかなりありました。しかし、コンバインが見えなく、全く慌てて刈り取る様子がありません。聞いてみると春まきを含め品種がたくさんあり、6週間もの収穫期間があるそうです。また、小麦は非常に短く、膝ほどしかなく収穫の目安は、穂が下に垂れ下がるまでとのこと。収量は8俵程の見込みの様でした。乾燥機はあるようだが、急がないところを見ると保管の為に品質保持程度の利用と思われます。2戸共同でコンバインを利用しており、他農家の受託を含め今年は140ha程の刈り取り面積とのことでした。刈り取り



を急いでいない事が理解出来ないので「品質が低下したらどうする?」と聞くと「家畜飼料になっても20%安で済むので気にしてない。」とのことでした。どうも納得出来ないのも、それでは保険に入っているのかと再び聞くと「雹ひょうに対するものくらいだ。」という答えでした。どうしても疑問が残りました。

肥料の投下に対する規制は無いが、土壌診断を必ずして無駄な肥料は使わないという事でした。灌水はめったに必要なく土地改良区のような組織は無いそうです。ただし、スウェーデン南部は必要な所もあるそうです。トラクターは、200ps/1400万円程度で日本とそう変わらないと思いました。ガソリンの値段も同じくらいでした。補助事業で今年イモの選別計量器を30%で導入していました。補助は屋内の物しか対象にならないそうです。当地も農家戸数は減少しているが国の審査が厳しく新規参入は少なく、農地の売買も国の関与が複雑な為、賃貸が主だそうです。



酪農家・アイスクリーム製造(スコーグス エリクソン氏)

200年前からこの地で営農しているそうです。見学には父親、息子、娘の3人で対応してくれました。総頭数200頭、内搾乳70~80頭(ホルスタイン)その他、肉牛を飼養しており、娘さんがアイスクリーム作りを行っていて、経営の多角化を図っていました。そのアイスクリームをご馳走になり、その後牛舎を見学しました。建物は古いものですが、立派なミルクキング・パーラで搾乳をしていました。乳量は日本とそう変わらないようでしたが、乳代は35円/1Lで日本の半分以下でした。飼料代などの政府の補填はないかと聞きましたが無いとの事でした。「なぜ200年も営農を続けられたのか?」と聞くと「時代に合わせて営農の形を変化させて対応してきたから」とのことでした。



農業高校(担当者・ロマンラーシュ エリクソン氏)

1950年開校・学生数450人・敷地は農場含め220ha・牛舎(2010年建築)総飼養頭数200頭・搾乳牛75頭・豚30頭その他、市で扱う肉、羊、牛乳を生産している。同じような農業高校がスウェーデンには20校あるそうです。バイオ燃料による地域暖房を利用した温室もありました(暖房はレクサンド市全体をカバー)。

ダーラナ地方を中心に学生数450人。男女比は半々だが、近年志願者の減少が見られるそうです。そのため、独自の取り組みとして、札幌近郊に学生を農業研修に派遣するなど、近郊にはない野菜や花のプロジェクトに積極的に取り組んでいるそうです。施設はみな新しく、北海道の農業高校よりも立派な環境で学んでいる様でした。



COOP(ラーシュ バックルンド会長)

はじめは酪農家の集乳などを主な事業として発足した組合が、20年程前、倒産した家畜屠場と精肉加工場を買収したのが始まりです。精肉加工品は地域産に限定してブランド化に成功しているとのこと。現在は540名の組合員と、当初35名だった職員は現在90名になっています。10名の運営委員がおり組合長、会長の構成で事業運営しています。また林業や観光事業のサポートも行っている。事業の成功と拡大によりホッケー場を2面作る。地域ブランドとしてのこだわりから、他地区や他国の肉の加工依頼を全て断っている。大きな投資に組合員の賛同を得ることが出来たのは、地域と組合員の畜産業維持の強い思いがあったからで、商品開発・販売促進・ブランド化成功には、コンサルタントも利用したそうです。

まとめ

森林と湖に囲まれ自然豊かなスウェーデン・レクサンド市の農業を一日の短い時間で、すべて理解し語り合う事は難しいことでしたが、同じ農業に携わる者同士の楽しい交流から得られたレクサンドの人たちの思いや営みは、十分知り得ることができました。

ジャガイモ・小麦農家のラーシュさんは、若い農場主と機械の共同利用をしていましたし、酪農家のスコークスさんは、親子3人で力を合わせて畜産の多角経営に取り組んでいました。COOP のラーシュさんは強いリーダーシップを発揮し、組合員も事業発展にしっかり結集した結果、大きな成果を挙げています。スウェーデンの人々は、個人主義が思想の中心にあると思っていましたが、家族を中心に人と人が協力し合い、厳しい自然と経済環境に何百年も対応して来た歴史を感じました。当別に似た風景と気候の中、同じ農業者として共感を覚えるとともに多くの参考を得た研修となりました。これからは、継続される交流の中で今回蒔かれた種が、当別とレクサンドに大きな花を咲かすことに取り組んで行かなければならないと考えます。農業班団員一同、今回の25周年事業に参加できた事と無事研修を終える事ができた事を関係各位に、感謝を申し上げ報告といたします。



当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加して ～グループ別研修(教育関係)に関する報告～

1 はじめに

今回の当別町・レクサンド市姉妹都市提携25周年記念訪問は、当別町とレクサンド市が人的交流や経済交流を始めて四半世紀という節目の年に当たるとともに、今までの交流を振り返り、今後に向けて両地域の更なる発展を目指して、各部署ごと課題をもつて臨んだ。スウェーデンの教育情勢を実際にその目で確かめ、国民性の一端を肌で感じ取るため、視察を行ったところである。以下に、その視察の概略を報告する。

2 小学校訪問・ワールドカフェ〔3日目：9月7日(金)〕

〔参加者氏名〕

- | | | | | |
|--------|--------|-------|-------------|--------|
| ・山内秀治 | ・杉野秀雄 | ・伊藤伸哉 | ・二ノ宮隆精 | ・佐藤友彦 |
| ・坂本千鶴 | ・渡邊光太郎 | ・佐藤直己 | ・鶴野彩子 | ・竹原知美 |
| ・島田かおる | ・土井大輔 | ・川崎一彦 | ・川崎Lillemor | ・山口奈々 |
| ・小田原彩夏 | ・伊藤萌枝 | ・新谷舞子 | ・古市保志 | ・高橋了 |
| ・小田島道朗 | ・鎌田美樹 | | | (※敬称略) |

午前中に小学校の視察を行った。学校に到着後、資料をもとにレクサンド市における学校組織や教育活動の説明を受けた。スウェーデンの教育制度は日本とかなり異なっている。授業料や給食費など、保護者が負担する教育費が大学まで無料であるところ、小中学校のほとんどが小中一貫制であるところ、1学級の高福祉の上で2人知らずであるところ、なごやかな環境にまで日本の保障が及んでいることを感じた。今後の日本の教育の方向性を考える上でも、大いに参考になった。

また、学校毎の特色ある教育活動が重視されており、視察を行った小学校では環境教育に重点を置いていた。今回も野外活動が実施された。湖へ、トヨタのトラックが引く荷車に乗って移動した。その後、子どもたちが野外活動を行っていた湖へ、トヨタのトラックが引く荷車に乗って移動した。その湖は、なんと子どもたちが先生方と一緒に先生方が創ったものと聞かされ、一同、驚きの声が上がった。湖では子どもたちが楽しんで動植物の観察、収集を行っていた。

さらに、車に分乗し別の活動場所へ移動。ここでは子どもたちが、自然の中で昼食の準備を行っていた。子どもたちはお互いに協力しながら、全員で作業を行っていたのが印象的であった。森の中を探検後、子どもたちの作った昼食を少し味見をさせていただいた。日本のヤキソバのよさを感じ、とても美味しかった。このような体験的学習を通して、生き生きと子どもたちが活動している様子を見て、教育の質の高さを窺うことができた。

ただ、それらの体験活動を、どのように実際の学力に結びつける教育活動を行っているのかは、今回の訪問では見られなかったのが残念である。しかし、交流を通してスウェーデンの教育と日本の教育のよさを発見することができた。今後も交流を継続することで、お互いのよさを取り入れながら子どもたちのさらなる成長を目指した教育活動を構築していきたいものである。

午後からは、レクサンド高校でのワールドカフェに参加。訪問団とレクサンド高校生との間で小グループをつくり、「日本のイメージ」「日本の良いところと悪いところ」「これからの交流で発展させたいもの」について、ディスカッションを行った。最後にグループ毎の発表を行い、交流を深めた。英語を介しての、緊張の中にも楽しい交流の場となった。



← 訪問したイェルダ小学校



← このトラクターで移動しました



← 人造湖での活動風景



← ワールドカフェの様子

3 幼稚園訪問〔6日目：9月10日(月)〕

〔参加者氏名〕

- ・杉野秀雄 ・伊藤伸哉 ・二ノ宮隆精 ・佐藤友彦 ・坂本千鶴
 - ・渡邊光太郎 ・佐藤直己 ・鶴野彩子 ・竹原知美 ・島田かおる
 - ・土井大輔
- (※敬称略)

テッパン幼稚園を視察。(※テッパンとは「小さなお庭」という意味) 現在80名の園児が通園しているとのこと。1998年、新しい法律が制定され、あらゆる子どもたちには幼稚園に行く権利がある」との考え方のもと、富める者、貧しい者、未婚者、既婚者、健常者、障がい者等、あらゆる状況にある子どもたちも、幼稚園に受け入れることになった。

そのためテッパン幼稚園ではそれまでの指導方法を、子どもの目線に立って見直した。その結果、①子どもの目線ではロッカーや机、椅子ばかりが目立ち、遊ぶ空間が少ないことに気づいた。また、子どもの成長に合わせて②クラス分けを完全に年齢別にした。

並行して、指導者の教育哲学の徹底を目指した。その根幹は、a) 子どもは0歳児でも学ぶ力を持っているとの認識で接すること、b) 自己決定の場面を多く持ち、自分たちに考えさせること、c) 幼稚園における生活の延長が家庭、学校、社会へと結びつくものであること。

a) についての具体例としては、小さな子どもはまだ自分の考えや思いをうまく伝えられないため、人形等を使って人形に話をさせたあと、人形にやりたいことをさせることにより、意図疎通を図る。b) については、例えば小さな家を作った時、「屋根に昇っても良いか」と尋ねる。皆が「ダメ」ということによって、「屋根には昇らない」というルールが成立する。c) については、ネズミのぬいぐるみを10匹隠し、みんなで探させる。9匹見つかったとすると、あと何匹いないかを考えさせ、算数の考え方を育てていく。

また、入園を希望する保護者に対しては、事前に家庭訪問を行う。それは家庭環境がどのような状態なのかを知るためである。さらに、入園が決まったら、3日間、事前入園を親と共にしてもらう。その中で親には、子どもの人形を作ってもらう。それが子どものシンボルとなる。出欠の確認や、健康状態の確認、こどもたち同士のコミュニケーション、子どもと職員とのコミュニケーションの手段として利用していく。

テッパン幼稚園を訪問し、全体として感じたことは、子どもの教育のための哲学が徹底しているということ。また、子どもたちの持っている力を伸ばす教育が徹底されているということ。これらのことについては、今後、日本の教育にも必要になってくると実感させられた視察であった。



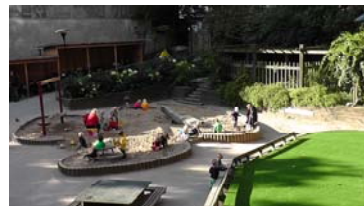
←
右の建物の中が
幼稚園です



←
入り口に靴箱
はありません



←
右側の方が園長
先生です



←
中庭で遊ぶ園児



←
園児の作品



←
100年前の机と
椅子も活用

今回の訪問団結成、及び、訪問に当たり、多くの方々大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

D 班スウェーデン社会福祉の研修報告

代表 堀 優理、山下 秀孝

はじめに

既にスウェーデン王国は社会福祉に関しては、世界一と進化している。2012 年 9 月、当別町姉妹都市提携 25 周年レクサンド訪問団研修プログラム「Dグループ 老人福祉施設等視察と家庭訪問及び建築中保育園見学に参加したので報告する。

年 月 日 2012 年 9 月 7 日(スウェーデン現地時間)

研修内容 1.老人福祉施設 8 時 30 分～10 時 00 分
2.一般家庭訪問 10 時 25 分～11 時 00 分
3.建設中の保育園 14 時 00 分～14 時 50 分

参加者 高谷 茂 臼杵英男 渋谷政夫 佐藤良子 大畑富雄 工藤和彦 澤内律子
堀 優理 山下秀孝 (加藤欽也名誉領事、加藤典子、前川二郎、鈴木 岳
日本旅行北海道南雲香澄、トーモク社員9名と同行)敬称略

1. 老人福祉施設視察研修

レクサンド市福祉局長と老人ホームチブレホーム所長の説明で施設を見学。

レクサンド市の人口 15,000 人に 5 ヶ所の老人ホームが有り、3 ヶ所でデイサービスをしています。ショートステイを含め 225 人収容でき、職員数は 225 人。

入所希望者は、福祉局に申請を出し審査を受けます。スウェーデンは親と子が一緒に暮らさず、子は独立します。基本は在宅で支援を受けて生活していますが、高齢や、一人暮らしで買い物、冬の生活に困難が生じるなどを考慮します。申請から通常は 3 ヶ月後には入所できます。

チブレホームは 36 人の定員で職員は 39 人。看護師と准看護師三交代制で日勤・夕方勤務・夜勤。准看は1年半の教育で資格ではないけれど、ケア資格を取得できます。賃金は個人交渉で 25,000～35,000 クローネ(350,000 円～490,000 円)准看で最高額は 23,000 クローネ。(322,000 円)身分は市職員です。(1 クローネ 14 円で計算)

入所すると一人に一人のケアマネージャー(日本での該当はケアワーカーだと思ふ)がついて、自分史の作成やダイニングノートを作成しています。部屋の基準として必ずミニキッチンが備え付けられています。朝・昼・夕の食事と午前のお茶、午後のお茶、夜のお茶時間があり、軽食が出されます。食事の基本は食堂ですが自分の部屋でとることもできます。部屋のキッチンでは自分で簡単なお茶を入れるなどをなさっています。火災予防のため電磁調理器です。キッチンは高さが調節できます。



入所の自己負担額は 1 ヶ月で、住居費が 2,500 クローネ～3,500 クローネ(35,000 円～49,000 円)。食費が 3,500 クローネ。他に介護費用がかかります。

平均的な年金額は 7,000 クローネ(98,000 円)で、お金を使えるように 4,000 クローネは手元に残す決まりがあり、支払うことができる 3,000 クローネを施設に支払い、あとの不足分は公費で補います。施設にもチブレホームのような公的施設と私的施設(介護付高齢者住宅)があり、お金をたくさん使える人がそちらを使うのは日本と同じです。



税金は 70%、市・県に 20%、国に 20%支払い、あとは消費税等で 30%の負担。36 万クローネ以上の収入のある人は市・県のみ税金を支払います。

老人ホームは 1,800 年頃からありました。建築費の 2%は芸術作品を買い入れるという法規制があります。

ホーム運営のエネルギーはペレットボイラーを利用し、セントラルです。

介護は毎日のことですので、食事介助でしょうえん 靭炎、体位交換等の介助で腰痛がありました。が、さまざまなかいご介護ようぐ用具が改良され、今では職員に腱鞘炎やようつつ腰痛はありません。

補足: 介護用品は体重の支える物についてはセラミック合金と思われる軽量で手触りはスチール、体型に合わせてフレキシブルにサイズ変更できる電動の用具が使用されており、日本だと男性職員2人がかりで移動するような物も片手で動かせました。

以上が、チブレホームの報告です。



2. 建設中の保育園

まさに建設中の保育園に出向き、現場責任者に案内していただいた。工事は建物の屋根、外壁が出来、電気工事、配管、内装はこれからの状態であった。この建物はエコ技術を導入し、地中熱ヒートポンプとソーラーパネル採用したところが最大の特徴である。



建物の外観

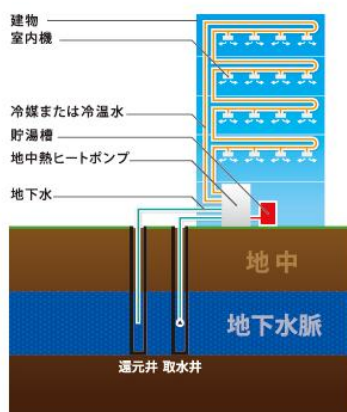


内部様子

2-1. 地中熱ヒートポンプ

地中熱ヒートポンプは地下 200m から約 13℃水をくみ上げてコンプレッサーにより、水を圧縮し、

ノズル(水の通りを細くする)から約 63℃の熱が発生する原理を用いて、その熱を一旦、貯熱タンクに貯めて、必要に応じて貯熱タンク内の熱交換器により循環不凍液熱源を循環ポンプで床暖房内を巡回させる仕組みである。加えて照明器具と人の運動で発生する熱でこの建物内の暖房がまかなえることである。また、私の考えであるがこの保育所と周辺の保育所の食事調理もするのでこの熱もかなり



利点

- ・夏は冷房として利用可能
- ・エネルギーコストが安価
- ・二酸化炭素 CO₂ 発生が減少

欠点

- ・地下水パイプが詰まる可能性が大
- ・設置費用が高価(ボーリング費用)
- ・停電時は使用不可
- ・古くなると保守費用が増大

2-2. ソーラーパネル

最大電力 6KW ソーラーパネル(大きさ、枚数は不詳)を屋根に並べて設置し、ソーラーパネル直流電力を得て、パワーコンディショナーに送られる。

パワーコンディショナーは電力会社の交流電源に位相同期してソーラーパネル直流電力から交流電力変換する。発電された電力は主に施設内で使用され、余剰電力は電力会社に売電が可能である。

利点

- ・電気代が安価
- ・二酸化炭素 CO₂ が発生皆無

欠点

- ・太陽が出ている間のみ発電
- ・天候に発電量が左右
- ・停電時はシステム停止
- ・材料費が高価

2-3. 感想

2つエコ技術とも日本でも盛んに導入されているので、特に新しい技術ではないが、レクサンド市は積極的に新技術を導入し、未来の市民となる子供を育む市政の意気込みを感じた。

今回は建設中なので、照明、機器などの省エネする工夫は未確認であった。

スウェーデン住宅は一般日本建物とは違い、防寒対策がしっかりしていて、壁断熱材(石綿)の厚さ、窓枠は複層ガラスが2重、熱交換換気システムなどは建物内部熱を極力外部に排出を抑えていること等が特徴である。また、レクサンドは地震が少ないようだが、地震が多いわが国ならの耐震対策も気になった。

2×4工法で間柱の間にコンパネ板と鉄帯をクロスに張り、地震建物強度を確保していると思われた。(また、レクサンドの積雪は当別より、かなり少ないようである。)

私は元一技術者として彼らがこれからの電気配線、配管、機具設置をする施工方法が気になったので、また、レクサンドへ来る機会があれば、完成した保育所を見学したい願望ができた。



壁の様子

3. 家庭訪問

私たちがお邪魔した一般家庭の家は元学校を改造した2階建ての家で、住宅はシリアン湖が見える場所にあり、玄関に近づくと Ylva Skarp さんが笑顔で出迎えていただき、建物内に入ると、彼女のセンス良さが部屋随所に現れていた。



家の外観



出迎える奥さん

私たちは1階のみ案内されたが間取りは玄関4畳、台所8畳、居間10畳が2部屋、ユーティリティ8畳(広さは概算)とかなり広い。庭はどこが境界かと判断ができないがとにかく広く、芝一面で綺麗に刈ってあった。一見、ホテルロビーの中に案内された感じで、壁は白に統一され、天井は板張り(学校のなごり)で天井高3m位であった。ユーティリティ室角隅に大きな薪ストーブがあり、床暖房しているとのことであった。しかし、窓下には電気暖房ストーブが見えた。調理は薪燃料であったが、近代的なオーブンは電気であった。



広い庭

本宅の脇にデザイン作業小屋があり、そこは奥さんのアトリエで文字を墨絵主体にデザインし、ポスター、食器などに才能豊かに描かれた作品を作り、販売している。

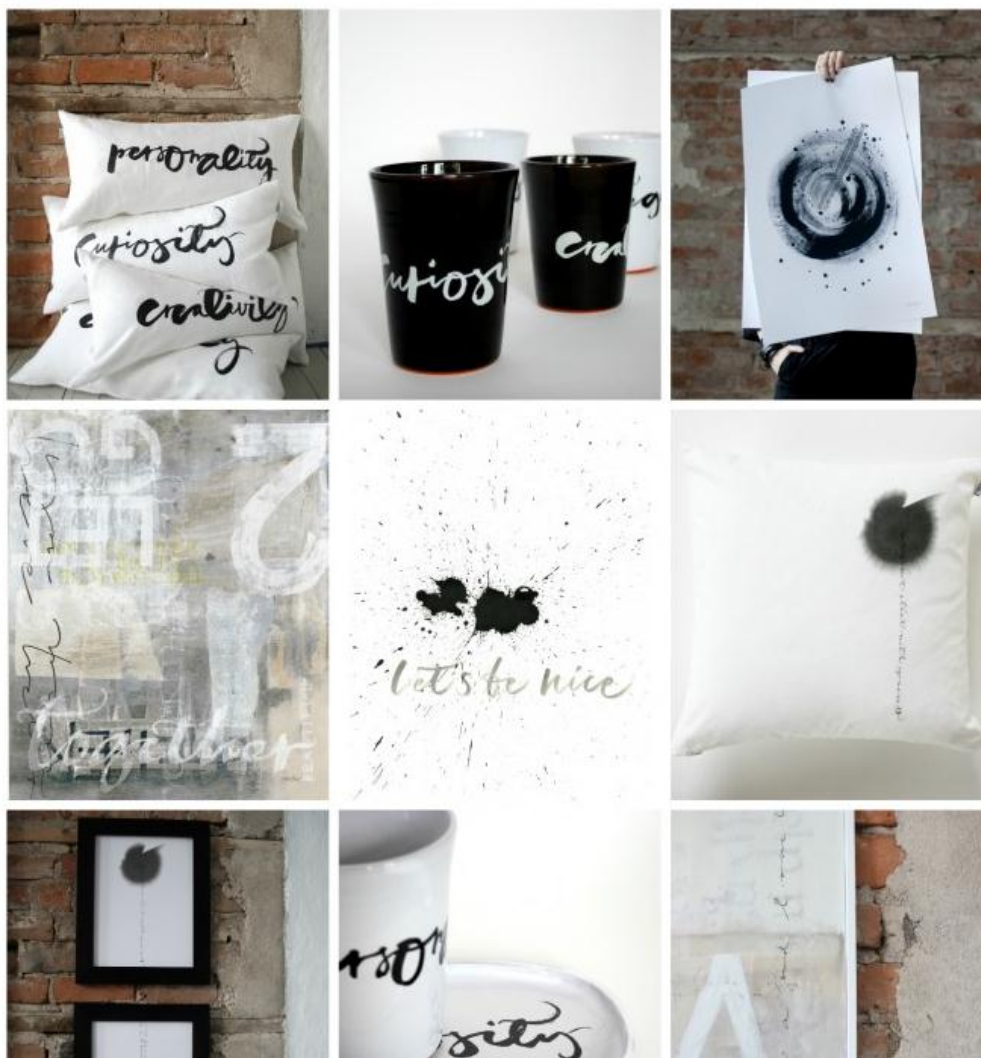


台所



居間

彼女のホームページから <http://ylvaskarp.se> 作品例を紹介する。



感想

以前学校だった家を改造したので普通の家庭住宅と少し異なる間取りと広さがあり、驚くことは建築年数が100年以上経過している家には見えなかった。

私たちのために、家を案内していただき感謝申し上げます。

4. 参考資料

レクサンド・コミュニティの主なる仕事は社会福祉と学校教育である。

スウェーデンの社会福祉を説明する前にどのような公共部門になっているかを説明する。

国(National)レベル、広域(Regional)レベル、地方(Local)レベル、3つのレベルの行政機関をもっている。

・国レベル 内閣、省、中央政府の代理

・広域レベル ランステイングの他、レーン(Län)府や中央政コミュニティの他、中央政府代理支部

・地方レベル コミュニティの他、中央政府代理支部など

*レーン府: 中央政府の機関として存在しており、主に、公共事業や環境保護を含む地域計画を指揮

各レベルで機能分担、事務配分が明確になっており、コミュニティ、ランステイングが国の出先機関として委任事務を引き受けるというスタイルでないことから生じているといえる

コミュニティ(Kommun)(市町村レベル)

学校教育は、スウェーデンのコミュニティの最も重要な機能の一つであるコミュニティは、6歳の小学校入学直前クラス、7歳から16歳までの義務教育、義務教育修了生の9割が入学する高等学校、成人学校や移民向けスウェーデン語プログラム、青少年向けあるいは知的障害者向け教育プログラムなどに責任を負っている。国に承認された義務教育、高等学校レベルの私立学校を含み、大学に入るまでのあらゆる教育が含まれるといえる。こうしたところに、コミュニティの補助が与えられ高齢者福祉も、大きな位置を占めているものの一つである。高齢者が、希望をもち、プライバシーを守り、自力で安心して過ごせることがその目標とされる。この分野には、高齢者住宅や退職者ホームの供給の他、各住居やアパートに食事やホーム・ヘルプのサービスを提供する。また、タクシー利用への補助やデイ・ケア・センターの運営などを行う。医療の分野でも、老人医療については、県から事務を引き継いでおり、老人介護関係はすべてコミュニティの事務となっている。児童福祉、プリスクールは、過去40年の間に、大きく成長してきたコミュニティの仕事であり、両親が働いているか学校に通っている1歳児からサービス供給が始まる。学校入学前の幼児には、プリスクールや家族デイ・ケア・センター、オープン・プリスクールのサービスが供給される。小学校に入っても、放課後の時間を過ごす施設を設けている。

ランステイング(Landsting)(県レベル)

ランステイングの主要な機能は、医療サービスである。若干の私立病院を除き、病院はランステイングの保有である。ランステイングは、病院での医療・看護(二次的ケア)、地域健康センターでの外来患者への医療(一次的ケア)の責任を負っている。外来医療システムには、産科や小児科もある。また、歯科、精神科に関する医療にも責任を負っている。